
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 120

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2381. どこまでも広く深まる感謝の念
- 2382. ガラクタに宿る真理
- 2383. 名前を思い出す夢
- 2384. 不思議な古書を読む夢
- 2385. 今朝方の夢の最後の場面
- 2386. 黒体の不気味な魚を釣り上げる夢
- 2387. 生きた絵画
- 2388. 充実感と幸福感に溢れる日曜日に向けて
- 2389. 分散的記憶
- 2390. 定量化基準の見直し
- 2391. 研究に関する補足
- 2392. 能動的な反復学習
- 2393. 高度な発達段階の言語特性
- 2394. 絶え間ない模倣と創造
- 2395. 内面の発達と言語の発達
- 2396. 固有の日々を生きて
- 2397. 創造の流れへの返礼
- 2398. 作曲実践と多様な意識状態
- 2399. 躍動する一つの織物
- 2400. この世界との融和

小鳥とバッハ。両者はコインの表と裏の関係にある。いや、両者は一つのコインとして、一者としてこの世界に存在している。平均律クラヴィーア曲集と小鳥の鳴き声を朝から今までずっと聴きながら、そのようなことをふと思う。

書斎の窓から見える赤レンガの家々の前を通る道は、数日前から工事が始まった。工事にあたる作業員は朝の七時から働き始めている。これは毎朝私の心を強く打つ。昼食を摂る食卓の窓からも作業の様子が見え、今日の昼食時には犬の散歩をしている人と作業員が何やら談笑をしていた。その光景を見て、私はとても幸福になった。大げさでも何でもなく、その光景の中に人間として生きることの喜びがあった。今もまだ工事は続いており、耳を澄ませば作業員が動かす機械の音が聞こえて来るかのようだ。

先ほどのオンラインミーティングの後に仮眠を取っている時、この世界で生きていることへの感謝の念をどのように言葉にすればいいのかをふと考えていた。より正確には、感謝の対象と範囲について考えを巡らせていたのである。ベッドの上で横たわりながら、私が毎日このように日々を充実感と幸福感を持って生きていられることに関して、私を産んでくれた両親に対する深い感謝の念が生まれた。それは一見すると、ありふれた事柄のように思えるかもしれない。

しかし、私は両親に対する感謝の念がどこまでも深まっていくものであるということに改めて気づいたのである。この世界の森羅万象は無限のホロン階層を持っている。それは両親に対する感謝の念にも当てはまり、それはどこまでも無限に深まっていくものなのだ。言葉にならない感謝の念を持ちながら、私はこの感謝の念が深さだけではなく、範囲を拡張させていくことにも気づいた。感謝という一つの生き物が、より深く、より広く変化していく姿を見て取ったのである。

両親から祖父母へ、曾祖父母へ、近親者のみならず、現在の私を取り巻く人々、過去の私を取り巻いていた人々・・・感謝の念を抱かせる対象範囲がどんどんと拡張していた。私は感謝の念を持つ対象があまりに広く、あまりに深いことに気づき、対象が一切掴めないところまで拡張しうることには気づかされた。

そこで結局私は、「全体」に対する感謝の念を捧げるしかないのではないか、と思うに至った。感謝の念を捧げるべき対象は、個別具体的な人だけに留まるのではなく、あるいはそこに留まってはならず、生きていることへの感謝の念はこの世界全体にまで拡張される必要がある、と強く思ったのである。感謝の念が向かう先はこの世界全体だったのだ。なぜならその念は、そもそもこの世界全体からもたらされているのだから。

私が今このように欧州で日々の生活を送っていることの意味は、人間として生きることのこうした真理に一つ一つ気づいていくことにあるのだと思わされる。フローニンゲンの空はそのように語っているし、小鳥もそのように歌っている。自分という一人の人間がこのようにして生きていたということ、そして今そのように生きているのだということを書き留めておきたかった。フローニンゲン:2018/4/6(金)
15:16

No.953: The View of the Danube

The second day after I came back from Central Europe started. The view of the Danube is still vivid in my memory. As well as the openness of the views, I wish my life to be much opener.

Groningen, 08:24, Monday, 4/23/2018

2382. ガラクタに宿る真理

穏やかに今日も一日が終わりに近づいていく。時刻は夜の七時半を回った。つい今しがた夕食を摂り終えた。なぜそのようなことまでここに書き留めているのだろうか。もはやこの日記は完全に一人の人間が生きた存在記の様相を濃くし始めている。独白形式で綴られていくこの一連の日記は、たった一人の人間のために書き残されているがゆえに全ての人に向けて書かれているのだろう。自分だけのために、そして自分という全ての人のために今日も明日も日記を書き続けていく。

今日の昼食後に行われたオンラインミーティングでの対話を未だ忘れることができない。協働者の方が語ってくれたエピソードに込み上げてくるものがあつた。一人の人間が真摯に他者と向き合い、真摯にその生を全うしようとする姿勢には打たれるものがある。ミーティングが終わった後、またしても私はこの人生をたった一人で歩いているわけではないことに気づいた。

これは当たり前の気づきなのかもしれないが、私たちは往々にしてその事実を忘れがちなのではないだろうか。私もそれを忘れがちだ。だから気づいたときにここに書き留めておくのである。真理はいつもそこにある。この世界を生きる中で、様々な誘惑によって真理を見る眼が曇らされてしまうことが問題なのだ。

西の空が黄金色の夕日で輝いている。眩しいと分かっているながらも、ついついその輝きを直視してしまう。夜の八時に近づいてきたフローニンゲンはまだまだ明るい。本当に日が随分と延びた。

繰り返しになるが、どうしても今日今この瞬間にこうして生きていることへの感謝の意を伝えたい。誰に伝えるべきか分からないのであれば、この世界全体に伝えたい。

フローニンゲンの夕方の空を無数の鳥たちが飛び交っている。この世界には鳥がいるのだ。この事実は驚愕に値しないだろうか。

この世界には鳥がいるのだ。自分とは異なる存在者として鳥がいるのだ。

フローニンゲンの街には空がある。空があるのだ。

これもまた驚愕に値しないだろうか。私は今とても驚いている。この世界にはなんと無数の「多者」で溢れていることか。私という存在もまさに多者を構成する一つであり、それらは全て「一者」から生まれている。

なるほど、やはり感謝の意を伝えるべき対象は、この一者なのだ。何気なく日常を生きる普通の私はいかにそのことを忘れがちか。この世界において真に目覚めて生きていくというのは、忘れがちなこうした真理に絶えず自覚的になりながら全ての活動に従事することなのだろう。覚者というのはそのように生きている人のことを指すに違いない。

今日、この世界の中で一人の人間がそのような気づきに至り、この世界に対して多大な感謝の念を持って生きていたというのは本当に些細な事柄かもしれない。目の前の裸の街路樹の枝が地面に落ちたのと同じぐらいのことだと思う。だが、それでも一人の人間が今日というこの瞬間にこのように生きていたということを、私はここに書き留めておきたいと思う。この日記がガラクタとみなされてもそ

れは構わない。事実ガラクタなのだから。そして、真理はガラクタに宿るのだから。フローニンゲン：
2018/4/6(金)20:01

No.954: Grace from Central Europe

The third day has begun since I came back to Groningen. I can feel that a graceful flow is flooding into my life. Our lives are exactly flows. Groningen, 08:03, Tuesday, 4/24/2018

2383. 名前を思い出す夢

今朝もまた小鳥の鳴き声と共に目覚めた。時刻は六時半を過ぎ、辺りは少しずつ明るくなり始めている。また、小鳥の鳴き声が依然として外の世界に鳴り響いている。

ふと今朝方の夢について思い出す。夢の中で私は、大学時代のフットサルのサークルのメンバーと休日に大会に参加することになっていた。所用あり、私は現地で皆と会うことになっていた。その道すがら、足を引きずりながら歩く一人の少年を見つけた。そのうしろ姿からどこか見覚えのある気がした。

私はフットサルの大会の会場に向けて準備運動がてら走っており、その少年を後ろから走って追い抜くことにした。すると、その少年は足を引きずっていたにもかかわらず、追い抜いた私の横についていこうとするかのように早歩きを始めた。そこで私は足を止め、その少年の方を見た。

私:「ああ、やっぱりXX君の弟さんだったか。元気？」

私は、彼が一学年上の友人の弟だということにその時に気づいた。しかし彼と再会したのはもう何年振りであるためか、残念ながら彼の名前を忘れていた。私は必死にその場で思い出そうとしたがすぐに名前が浮かんでこなかった。

友人の弟:「ええ、元気です」

私:「その足はどうしたの？大丈夫？」

友人の弟:「はい、ちょっと怪我をしてしまっ。でも大丈夫です。もうじき治るとお医者さんが言っていました」

私:「それは良かった。これから学校？」

友人の弟:「はい、そうです」

私:「じゃあ、学校まで送って行ってあげるよ」

その後、私たちは彼が通う学校まで一緒に歩いて行った。いかんせん久しぶりに彼と会ったため、彼の近況を含めて様々なことを私は聞いた。するとすぐに学校に到着した。学校の外観を見ると、とても立派であり、校舎の入り口から外に出てくる生徒たちの様子からは、彼らの育ちの良さがうかがえた。友人の弟と私は校舎の中に入り、そこで私はまた彼に質問をした。

私:「そういえばススム君は何年生になったんだっけ？」

友人の弟:「六年生です」

私:「そうかあ、早いもんだね」

私は質問しようと思ったその時に、ようやく友人の弟の名前を思い出し、彼の名前を確かめるかのように彼の名前を呼んで質問を投げかけた。校舎の中はとても近代的な造りになっていて、私は少々驚いた。彼が向かう教室まで一緒についていき、そこで彼と別れようと私は考えていたが、この学校の施設の充実ぶりを見ると、もう少し見学したいものだと思わされた。目的の教室に向かうために階段を上っていると、彼の教師らしい一人の女性が声をかけてきた。

女性教師:「ユウト、足大丈夫？」

友人の弟:「ええ、大丈夫です」

女性教師:「あつ、初めまして。ユウトの担任の者です」

私:「初めまして。先ほど彼から聞きましたが、近頃は六年生から英語を学ぶそうですね」

女性教師:「ええそうなんですよ。ユウトも頑張って英語を勉強しています」

私たち三人は階段で少しばかり雑談をし、その女性教師と私たちは向かう場所が違ったため、途中で別れた。すると程なくして、彼が向かおうとしていた教室に到着した。どうやらそこは美術室のようだった。私の時代には想像できないようなテクノロジーが教室の隅に設置されており、どうやらそれを用いて美術作品を3Dで深く観察することができるようだった。

ちょうど目的の場所に着いたため、彼とはここでお別れをしようと思った。彼が四人掛けの長机の一端に鞆を下ろした時、隣にいた彼の友人が彼に話しかけた。

友人の弟の友人:「ユウト、今日の宿題やってきた？」

弟の友人:「まあね」

私:「それじゃあススム君、僕はここで」

友人の弟の友人:「ススム君？」

弟の友人:「実は黙っていたんですが、僕の名前はススムではなくてユウトです」

私:「そうだったか、記憶違いでごめん！」

どうやら私は彼の名前を勘違いしていたようであり、彼に謝った瞬間に美術を担当する教師が教室に入ってきた。そのため、私は彼にもう一度謝り、すぐさま教室を後にした。教室を後にし、やって来た階段を下りながら、彼の名前が間違っているはずはないと改めて思った。確かに彼と会ったのはもう何年も前の話だが、自分の記憶は正しいと私は思っていた。

階段を下り、校門から出ても私はまだ彼の名前について考えていた。そこで夢の場面が変わった。夢から覚めて改めて振り返ってみると、やはり友人の弟の名前は私が夢の中で思っていたもので間違っていなかったと改めて思う。実際には、彼とはもう二十年以上も会っていないため、今はもうすっ

かり成人になっているだろう。この夢は私に何を伝えているのだろうか？フローニンゲン:2018/4/7
(土)06:59

No.955: Scintillation of Spring

Although May is coming, today's morning is very cold. So, I switched on a heater. However, I can see the scintillation of spring even in such a cold day. I have a premonition that today is also shinning. Groningen, 09:03, Wednesday, 4/25/2018

2384. 不思議な古書を読む夢

今朝方見た夢を思い出していると、フローニンゲンの朝もすっかり夜が明けた。起床時に聞こえていた小鳥たちの鳴き声は今もまだ静かに聞こえている。また、ここ数日と同じように相変わらず私は、今日もバッハの平均律クラヴィーア曲集を聴いている。おそらく今日も一日中リヒテルが演奏するこの曲集を聴いているに違いない。

今日は午前中に、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの最終試験に向けて、課題論文の三読目を進めていく。幸いにも今日と明日は休日であり、比較的時間があるため、今日に全てを読み返すのではなく、半分程度目を通すことができたと思う。特に重要な二つの論文については明日の朝に読むことにし、それ以外の論文からまずは読み進めていく。昨日、このコースのグループ論文と一緒に執筆している友人のハーメンからメールが届いた。

ちょうど彼に依頼をしておいたパートが完成したそうだ。添付のワードファイルを開けてみると、彼が実に素晴らしい仕事をしてくれたことがすぐに分かった。ハーメンはアドビのフォトショップを活用し、課題の最後で提案する、対象としているオンライン学習環境に対する改善案を見事なイメージ図と共に書き上げてくれた。まだ文章をレビューしていないが、全体としての見栄えから、それは非常に良い出来のように思えた。

最終的な提出の前に、コースを担当するミヒャエル・ツショル教授からフィードバックをもらうために、私たちは現段階のドラフトを送った。ハーメンは本当に良い仕事をしてくれたと私は思った。あとは

私の方で、提出版の完成に向けて最終的なレビューを行っていきたいと思う。これがフローニンゲン大学で履修するコースの最後の課題であると考え、少しばかり感慨深い気持ちになる。

中欧旅行前日の午後に行われる最終試験に向けて論文を読み返そうと思った矢先、今朝方の夢の続きが思い出された。友人の弟と別れた後、私は大学のフットサルサークルのメンバーと大会に参加するために、その会場に向かった。時計の針を確認すると、「11:11」を指していた。時刻を見た瞬間、もう午前中の一試合目が始まっていると思い、私は午前中の試合に参加することを諦め、午後からの試合に参加できるようにしようと思った。

そう思うと少しばかり気が楽になり、ゆっくりと会場に向かうことができた。以前にもその会場を訪れたことがあったのだが、友人の弟が通う学校からその会場へ行く道を通るのは初めてであったため、私は携帯電話の地図を確認しながらそこへ向かった。

迷いながらもその会場に到着してみると、そこはフットサル会場ではもはや無くなっており、空き地にたたずむ家屋になっていた。その家屋の方に向かうと、中からそこに住んでいると思われる一人の大学生が外に出てきた。その大学生は少しばかり困ったなという表情を浮かべている。

私:「どうかされましたか？」

大学生:「いや～、空き巣に入られてしまったんですよ。とはいえ、盗られるものもなく、その点は助かりましたがね」

私:「そうなんですか、被害がそれほどなかったことは幸いですね」

大学生:「ああ、外にいるのもなんなんで、中で少しゆっくりしてってください」

その大学生の厚意に甘え、私は彼の家の中に入った。入ってみてすぐに気づいたが、この家には外の世界と部屋の中を仕切る壁がない。

私:「あれっ？この家には壁がないんですか？」

大学生:「ええ、ないです。なので冬は寒いです」

つまりこの家は、屋根はあるのだが、空き地の上に大きな本棚とテーブルだけが置かれているような造りになっていた。どうやら二階もあるらしく、そこにまた大きな本棚が置かれており、ベッドがその横に置かれているようだった。

私はこの家の造りを改めて見た時、それは空き巣も入るだろうと思った。いや、確かにこの家にはめばしいものはほとんどないが、あえて言えば本棚に収納されている本だけが貴重なものに思えた。その大学生は空き巣が入ったと述べたが、もしかするとこの空き地に来た通りすがりの人が本棚に収納されている本を読みに来ただけなのではないかとふと思った。

私は彼の本棚に収められている書籍が気に入り、ざっとそれらを全て眺めていた。すると、“Bach”というタイトルの本を見つけた。その他にも過去の偉大な作曲家の自伝がいくつもそこにあり、私はこれらの書籍に興味を持った。また、偶然手に取った古びた和書のページをめくっていると、そこに書かれていた記述に目が止まった。

発達科学者のカート・フィッシャーと親交のあった日本人の研究者が過去にいて、その方がフィッシャーを山口県に招いて、一緒に砂浜を歩いたというエピソードが記されていた。山口県はちょうど私が育った場所でもあるため、そのエピソードを大変興味深く読んでいた。そこから一気に本書全体を読み進めていった。

その日本人の方は既にお亡くなりになれているようだが、この方が残してくれた資料は非常に貴重だと思った。とりわけ、研究の過程でつぶさに残してきたメモは洞察に溢れており、こうした記録を絶えず残していったことに私は心を打たれた。

その書籍の最後の余白ページには、この古書が当時45,000円で取引されていたことがわかる数字が赤鉛筆で書き込まれていた。その古書をそっと閉じたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/4/7(土)07:46

小鳥の鳴き声が依然として響き渡る土曜日の朝。このところ、毎朝小鳥の透き通るような鳴き声と共に目覚めることが多くなっている。それは朝の陽気と相まって、春のフルートのような音色として知覚される。

時刻は正午に近づいてきており、午前中の仕事を一旦ここで区切りにしようと思う。午前中は計画通りに、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの最終試験に向けた学習を進めていた。実際にはついつい計画以上の論文を読んでしまった。本来であれば、それよりも少ない量の論文を今日の夕方までに読み終えれば十分だと考えていたのだが、今回は三読目であるためか、読解が非常に速やかに進んでいった。とりあえず今日は試験に向けた論文を読むことはやめにしようと思う。

明日は二本ほどの論文を比較的時間をかけて読み進めていく。二本の論文だけをあえて残していたのは、これらの論文は試験のための学習ではなく、個人的な関心に沿って広く深く読んでいきたいと思ったからである。片方は「分散知性 (distributed intelligence)」に関する哲学的な考察が含まれた論文であり、もう片方はジェームズ・ギブソンが提唱した「アフォーダンス」という概念を取り巻く三つの異なる思想について取り上げたものだ。

この二つの論文の概略を書き留めてみると、やはり自分の関心の矢は、その他の論文で紹介されているような科学的発見事項に向かっているのではなく、科学的発見事項を取り巻く哲学的な考察にあるのだということが分かる。明日は比較的時間をかけて、これら二つの論文をゆっくりと読み進めていきたい。その際に、過去二読した時のメモにさらに自分なりの考えを追加していこうと思う。

そこからは論文をもう一度読む必要性はほとんど感じておらず、試験の前日にその概要だけを確認するために全ての論文をざっと読み返す程度に留めたい。その代わりに月曜日から試験当日にかけては、それらの論文に対する自分なりのまとめを繰り返し読んでいくことにしたいと思う。そのまとめを読んでいる最中に、仮に不明確な点があれば該当論文に戻るようにする。

今から近所のスーパーに行こうと思ったのだが、ふと今朝の夢の最後の場面が思い出された。それは少しばかり不気味な内容だった。その前の夢の場面では、空き地にある壁のない家を訪れ、いくつか貴重な本を発見していた。その後に私は、その家と雰囲気の似た小屋の中にいた。

その小屋は先ほどの家とは異なり、きちんと壁があり、中と外の世界が隔てられていた。私はその小屋の隅に座っており、ふと後ろを振り返ると、そこには何人かの知人がいた。近くにいた知人に話しかけようとする、私はフローアの上に小さな蛇を見つけた。それは赤黒い色をしており、毒蛇のように思えたが、とても小さかったので大きな恐怖感を覚えることはなかった。

しかし、どのような毒を持っているか不明だったので、知人に注意を促した。その毒蛇は地面を這いつくばり、人の体温に反応するかのように、ゆっくりとだが確実に近くの人に向かっていくような習性を持っていた。私たちは蛇に襲われないように、小屋の中で絶えず場所を変えながら動き回っていた。私たちが動き回ることに応じて、蛇も地面を動き回り、私はその蛇の体が少しずつ大きくなっていることに気づいた。

あるところでその蛇はかなり大きくなった。私たちは「これはまずい」と思ったが、どうやらその小屋から外には出れないようになっていた。かなりの危機的状況に陥ったが、大きくなった蛇はなぜだか突如として人間に向かってくるのではなく、小屋の真ん中に置かれていた、和菓子の詰まった布団に向かって頭を突っ込み、その中にどんどん入っていった。

すぐに蛇の体は見えなくなり、完全にその布団の中に埋もれた。どうやら蛇はその布団の中の和菓子を食べているようだった。私たちはそれを見て、「これは蛇を退治する絶好の機会である」と思った。蛇がどこにいるかは布団の膨らみを見たら一目瞭然だった。知人の一人が小屋にあった太く大きな棒で蛇の頭を砕こうとした時、時間が止まったように感じられた。

時間が止まった感覚の中で私は、その知人が蛇の頭を砕いたら、その蛇は死ぬのと同時に、実はその蛇が私たちの気づかないところですでに食べ殺していた友人の血が大量に飛び散る姿が想像された。その光景を想像した瞬間に夢から覚めた。夢から覚めた時と同様に、夢の最後の場面を書き終えた瞬間にも小鳥たちが小さく鳴き声を上げていた。フローニンゲン:2018/4/7(土)12:06

2386. 黒体の不気味な魚を釣り上げる夢

今日は早朝の五時半に目を覚ました。この数日間と同様に、眼が覚めた瞬間に小鳥たちの鳴き声が寝室に響き渡っていた。起床時の時間帯はまだ闇に包まれていたのだが、そうした闇の中に小鳥たちの小さく、それでいて透き通った声が高らかに鳴り響いていた。小鳥たちがこのように早朝に

鳴き始めたのは、おそらく春がもうすぐやってくるからだろう。実際に昨日はとても暖かく、春の到来を強く予感させた。

今朝方の夢を少しばかり振り返っている。いくつか印象に残っている場面があるが、それらの記憶が刻一刻と薄らいでいる。記憶が消えてしまわないうちに覚えている範囲のことを書き留めたい。

夢の中で私は、ある波止場にいた。そこで小中学校時代の何人かの友人と釣りをしていた。今日の釣果はそれほど冴えるものではなく、私たちは釣りよりもその場での会話を楽しんでいたように思う。そろそろ釣りを終えようと思っていたところ、私のルアーが何かとても重たいものに引っかかったのを感じた。最初は海底の障害物にでも引っかかったのかと思ったが、それが鈍い動きをとまっていたために、何か大きな魚が掛かったのだと分かった。

私がリールを慎重に巻く姿を見ていた友人たちも、私のルアーに何か大きな魚が掛かったのだと気付いたようだった。そこからしばらく、私は友人たちに見守られながら、その大きな魚と格闘し、ゆっくりとだが確実にこちらの方に魚を引き寄せていった。いよいよ海面からその魚が姿を表すとき、私はとてもぎょっとした。

というのも、海面から姿を現したのは、全身が真っ黒の得体の知れない大きな魚だったからである。体長は60cmほどなのだが、その重さが鉛のように重かった。波止場にその魚を引き上げたとき、その魚の口からルアーを外すのがどこかためらわれたため、生き物に詳しく、得体の知れない生物にも臆することのない友人にルアーを外してもらった。

私:「ありがとう。その魚はすぐに逃がそう」

友人:「そうだね。じゃあそこから逃がすよ」

友人は手際よくその魚の口からルアーを外し、波止場の上から海面に向かってその魚を逃がした。それほど激しくその魚を投げたわけではないのだが、その魚は海に投げられた時、しばらく海面に浮かんでいた。黒々としたその体がどこか不気味な光を発しているように思えた。私はその魚が死んでしまったのではないかと少々心配したが、そこから数秒後にまた元気になり、海面に水しぶきを

上げて海底の方に潜っていった。その姿を見たとき、私は安堵感を覚え、そこで夢の場面が変わった。

それ以降に見た夢の記憶はやはり断片的なものになってしまっている。あるプールサイドで両手に持ちきれないほどの飲み物と食べ物を抱え、友人にその一部を持ってもらうようお願いしている場面を覚えている。そのとき、友人は一つだけ飲み物を持ってくれたのだが、もう少し別のものを持ってもらうように強くお願いしたことが印象に残っている。

また、その後の夢の場面では、小さな部屋に一人の教師と数人ほどの生徒がいて、これから芸術作品の評価を行うことになっていた。それらの作品は全て生徒たちが作ったものである。私はその生徒の一人であった。生徒たちが画用紙に描いた絵が黒板に貼られており、教師はどの絵から評価を始めるかを生徒たちに尋ねた。一人の生徒が勢い良く挙手をし、彼の絵から評価を始めていくとした。

そのとき、私の身振りが紛らわしかったのか、教師から見ると私も挙手をしたように見えたらしかった。そのため、教師は私の絵の評価を先に行ってもいいかと尋ねてきた。だが、私にはその意図はなかったため、代わりに一つ質問をすることにした。

私:「先生、絵画の評価をする際にはまず前提となる文脈を明らかにし、特定された文脈からその絵画を評価していく必要があると思うのですが、どうでしょうか？ある意味評価の観点が不明確なままでは、僕たちは絵画の評価などできるはずがなく、仮にできたとしてもそれは単なる感想報告会に留まってしまうと思うんです」

先生:「確かにそうだな。それでは評価の前提となる文脈を明らかにし、評価の観点を少し明確にしよう」

先生は私の質問に対して一瞬戸惑った表情を見せたが、質問の意図を汲み取ってくれ、事前に文脈と評価観点を明らかにした上で芸術作品の評価をすることにした。そのような夢が印象に残っている。一連の夢はどれも脈絡はないように思える。夢と夢との間には非線形的な溝があり、それでいて一つの全体としての夢を連続的に構成している。

夢というのは常に未知なる特徴を持っており、夢について意識を向ければ向けるほど、少しずつ未知なことが既知になっていく。それはどこか、自分自身を知ることと同じであるように思える。フローニンゲン:2018/4/8(日)06:35

No.956: Movement of Spring

The movement of spring is sometimes very calm and sometimes very powerful. I often think so recently. Groningen, 10:43, Thursday, 4/26/2018

2387. 生きた絵画

早朝の七時を迎える頃、完全に夜が明けたことを知る。今日が日曜日であるからか、この時間帯は辺りが本当に静かである。小鳥たちの声がまだ静かに鳴り響き続けている。こうした落ち着いた環境の中で日々の生活を送ることができていることにふと有り難さを感じた。

以前から私は、書斎の窓から見える景色を「生きた絵画」だと述べてきたが、今ではそこに小鳥たちの歌が加わっている。視覚的なものだけではなく、聴覚的なものも含めた生きた絵画がここにあり、これが自然が生み出す芸術作品なのだと思う。

欧州での日々が一日一日と過ぎていくにつれ、自分の感覚が徐々に開かれていく。そして、自分の内側に眠っていた成長の芽もまた外側に向かって開かれていく。

作曲実践に関して新たな習慣を始めたことを以前の日記に書き留めていた。これまでは就寝前の時間に作曲を行っていたが、その時間帯では集中力や創造エネルギーが減退している傾向にあるため、夜ではなく午前や午後に作曲の実践を行うというものである。今は最後の試験に向けた学習があるため、午前中に作曲をすることはできていないのだが、昼食後に作曲実践に取り組むことができている。そこで一曲ほど作ることができており、これは良い習慣だと思う。

今後はもしかすると、無理に午前中に作曲実践をする必要はないのかもしれない。やはり今はまだ学術研究や協働プロジェクトを優先にし、それらの仕事は午前中に行う必要があるだろう。もし時間が余れば、昼食前から作曲を始め、昼食後にまたそれに取り掛かり、一曲を完成させるという流れ

にしたい。また時に昼食後にオンラインミーティングを含め、他の仕事が入る場合もあるであろうから、そうした日にはやはり午前中に作曲実践が行えるように工夫をしたいと思う。

実は今朝も現在取り組んでいる研究のデータを再度整理していた。少しばかり分析の観点を変更する必要があり、データを整理し直してもう一度分析を行う必要が出てきた。昨夜もそのデータ整理に時間を充てていたため、結局就寝前に行うことにしている曲の構造パターンの把握を目的とした実践に従事することができなかった。昨日はどうしても研究を優先させたいという思いの方が強かったため、それは仕方ないだろう。

こうしたことが起こり得るため、やはり曲を作るという実践は午前か午後にできるだけ行うことが賢明だ。作曲理論の専門書の具体例を自ら手を動かしながら再現していくという実践は、本当に無理のない範囲でゆっくりと進めていきたい。もちろん、これも毎晩行うことができれば理想だが、他の仕事の都合上、それを行うことができない日があっても仕方ないだろう。ただし、今日はその実践に時間を充てたいため、それを見越した形で夜までの時間を過ごしていく。

就寝前の時間帯は、棋士が棋譜をもとに棋力を高めていく実践を行うのと同様のことを私は作曲に関して行いたい。今日も充実した日曜日になりそうだ。フローニンゲン:2018/4/8(日)07:23

No.957: Crystallization of Each Moment

Today is like crystal. I want to live for the moment because our lives are the crystallization of each precious moment. Groningen, 10:03, Friday, 4/27/2018

2388. 充実感と幸福感に溢れる日曜日に向けて

今日という日曜日がより充実したものになるように、少しばかり今日取り掛かりたいことについて書き出しておこうと思う。書くことの効力と魔力はまさにここにある。文章を書くことによって、日々の物事が充実感と共にどこかに向かって伸びていく一本の線のように見える。もちろん、その線には紆余曲折があるのだが、その線が知覚されているか否かが重要であり、文章を書くことはそれを知覚させてくれる。

日々の一つ一つの取り組みが、どこか遥か彼方の世界に向かって伸びていくのが分かる。そして、その線こそが自分に他ならず、遥か彼方のその世界こそが自分がこれから向かっていく場所なのだと思う。そのため、今日取り掛かりたいと思っていることを時系列的に少しばかりまとめる。

早朝にまず取り掛かりたいのは、今週の木曜日に迫った「デジタルラーニングと学習環境」の最終試験に向けた準備として、二つの論文をじっくりと読みたい。一つはアフォーダンスに関する“Affordances: Clarifying and Evolving a Concept (2000)”であり、もう一つは“Practices of Distributed Intelligence and Designs for Education (1993)”である。

前者は分量としては極めて短いが、アフォーダンスの提唱者であるジェームズ・ギブソンの根幹思想について説明がなされているだけではなく、ギブソンのアフォーダンスの定義を修正拡張させたドナルド・ノーマンの定義と思想も明記されている。さらには、それら二つの定義と思想を昇華させる形で著者が独自の意味付けを行っている点も見逃せない。

後者の論文は、ケンブリッジ大学出版から出版された“Distributed Cognitions Psychological and Educational Considerations (1993)”という書籍の中に掲載されている論文である。私が好んでいるケンブリッジ大学出版だけあって、この論文も非常に面白い。偶然ながら、二年前にケンブリッジ大学を訪れた時に、同出版社の“The Cambridge Handbook of Situated Cognition (2009)”という書籍を購入しており、この書籍と今回の論文のテーマとは共通するものがある。

「状況的認知 (situated cognition)」と「分散知性 (distributed intelligence)」は異なる概念だが、共通するものがあるのは確かだ。今日は午前中にこの二つの論文を読み進めていく。論文を読み終えることができれば、引き続き研究データの整理を行いたい。以前の定量化基準を一つ見直したものがあ、そのため新たな基準を適用した時系列データを一つ作り直す必要がある。

これには少々時間がかかるだろうが、今日中になんとか作成できればと思う。この時系列データを作成することができれば、そこからのデータ分析はすでにRのコードが準備されているため比較的楽である。明日中にデータの再分析までを終わらせ、そこからはもうデータを触ることをしないようにしたいと思う。これ以降は、実際の論文の執筆に集中していく。

研究に関しては今日の午前と夕方まで行っだろう。その間に午後の一つオンラインミーティングが入っている。また一つ新たな協働プロジェクトに今後参画するかもしれない。その他に今日取り組みたいことと言えば、非常に細かいが、研究の方向性に若干の修正が行われたことと、研究で用いる従属変数の新たな候補についてアドバイザーのミハエル・ツショル教授に意見を求めるメールを送る。

これら一連の取り組みに並行して、昼食後に作曲実践に取り掛かり、就寝前に曲の構造パターンの習得実践に励むことができればその他に行いたいと思うことはない。今日も充実感と幸福感に溢れた日となり、それらの感覚は明日以降の日々にも滲み出ていくだろう。フローニンゲン:2018/4/8 (日)07:44

No.958: Music as Emergent Phenomena

Music can emerge through self-organization. In other words, music can have emergent properties. I'll investigate this topic. Groningen, 20:32, Friday, 4/27/2018

2389. 分散的記憶

思っていた以上に早い時間帯に二本の論文を読み終えることができた。二つの論文は共に洞察に溢れており、再度じっくり読み進める中でまた新たな発見があった。読書とはこのように、読み手である私たちが前回の読書の時とは異なる内面状態にあれば、常に新たな意味を私たちにもたらししてくれるものなのだろう。私たちの内側に小さな変化があれば、以前の読書とはまた異なる意味をもたらしてくれる点に読書の不思議さがあり、そこに読書の意義がある。

論文を読み進めていると、グレゴリー・バートンの印象的な言葉に出会った。翻訳すれば、「記憶の半分は私たちの頭の中に、残りの半分はこの世界に存在している」という言葉だった。読んでいた論文はまさに分散的知性を扱うものであったため、これは「分散的記憶」と呼んでもいいかもしれない。これは私たち個人が保持している記憶というよりも、この環境世界の中に埋め込まれている記憶である。

私たちが何か物体を見て、その物体によるアフォーダンスによって無意識的な行動を起こすのは、私たちの個人的な記憶による作用だけではなくて、もしかするとこうした分散的記憶によるものかもしれないと思う。人間とこの世界との関係性、そして人間知性への関心は尽きない。

今日のフローニンゲンの空は雲がなく、青空が広がっている。ただし、それは混じり気のない青空というよりも、少し霞みがかかった青空だと言える。そうした空の状態が太陽の光を和らげ、フローニンゲンの街に優しい太陽光を届けている。

早朝に、自分が以前に作った曲を一つ聴いていた。その曲を聴きながら、私は春へ問いを投げかけ、春は私に問いを投げかけていることを知る。また、私は春から回答を受け、春は私の回答を受けているという関係に気づく。日々を真に深く生きるというのは、内外世界におけるこうした応答を行っていくことなのかもしれない。問いを投げかける者と問いを投げかけられる者との境界線がますます透明になっていく。

今日はこれから、現在取り掛かっている研究を前に進めたい。幸運にも午前中の論文の再読が早めに終わったため、今日中に3000個弱の時系列データを作ることができるかもしれない。もしそれが午後の早い段階で終わったら、明日に予定していたデータ分析を今日中にやってしまう。標準化分散解析といくつかの統計分析をデータに施す。その結果のレポートはまた後日執筆すればいい。

今回のデータ解析をもって、それ以上は基本的にデータの解析を行わない。今月の中旬からはとにかく論文の文章を書いていくことに焦点を当てる。今回の研究もいよいよ佳境に入ってきた。フローニンゲン:2018/4/8(日)10:23

No.959: The Nature of Time

A dynamic system has sub-systems. If subsystems encapsulate different timescales, time can be nested in different layers. Time does not have any invariant characteristics. Time can be dynamically organized. Groningen, 20:53, Friday, 4/27/2018

昨日は五時半に起床したが、今日の起床は六時半だった。一時間ほど起床時間がゆっくりとなり、目を覚ましてみると、辺りはすでに明るくなり始めていた。書斎の窓から見える景色は薄い霧に包まれている。

数日前の天気予報では、今日からしばらくの間晴れの日が続く予定だったのだが、今朝方予報を確認してみると、今日のみならず、ここから数日間は晴れの日がないようだ。実際に今日は午前中に少しばかり雨が降るそう。天気そのものは優れないのだが、気温がようやく春らしくなってきた。確かにまだ一日の多くは暖房をつけるほどの気温であり、湯たんぽを使って寝ていたりしているが、随分と外気が暖かくなってきたことは確かである。

今週の金曜日からいよいよ中欧旅行が始まる。ワルシャワに四泊、ブダペストに四泊する小旅行である。両都市の天気予報を確認してみると、フローニンゲンよりも随分と天気が良く一安心だ。ワルシャワとブダペストでどのような出会いがあるのかは未知であるが、今回の旅もまた非常に意味のあるものになるだろうと予感している。

昨日は結局、随分と多くの時間を研究に充てた。今週の木曜日に行われる「デジタルラーニングと学習環境」の最終試験が終わり、中欧旅行を終えてから集中的に研究を進めていこうと思っていたのだが、少しばかり研究のことが気になり、昨日は随分と多くの時間を研究と共に過ごしていたように思う。とりわけ、三つの定量化基準のうちの一つの基準を見直し、3000個ほどのデータポイントを持つ時系列データをもう一度作り直していた。三つ目の基準とは、対象とするMOOCの講義に関する概念をリスト化し、各々のレクチャービデオの一つ一つのセンテンスがどれだけコースに関連した概念を内包しているかを定量化していくものである。

この時系列データを通じて、初回のレクチャービデオから最後のレクチャービデオを通して、コースに関連した概念がどのような変動性を持っているのかを明らかにすることを目的にしていた。得られた時系列データに対して、「トレンド除去変動解析」や「標準分散解析」を用いれば、変動性のフラクタル次元を特定することができる。特定されたフラクタル次元と学習成果(例:レクチャーの完遂率、クイズやテストのスコア)を比較することが今回の研究の要点であった。しかしながら、「コースに関

係する概念」をどのように抽出するかが問題であり、当初はコースの目的と各レクチャーのガイダンスに書かれている文章からボトムアップ的にコースに関連する概念を特定していった。

しかし、このやり方はどうしても恣意性を排除することができずにいた。例えば、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を活用すれば、そうした恣意性を抑えながら概念リストが作れたのかもしれないが、今回の研究ではその方法を採用することなく、全く別の方法で三番目の定量化基準を作った。「コースに関連した概念」という切り口から、「領域固有的概念」という切り口に変えることにし、後者であれば、今回研究対象のMOOCが取り扱う複雑性科学という領域が扱う重要な概念がすでに幾人かの研究者によって網羅的にリストアップされている。

一つは文献としてそうしたリストを見つけ、もう一つは複雑性科学の研究で非常に有名なサンタフェ研究所が公開している用語集を見つけた。それらの二つの資料を用いて、重なっている言葉を削除しながら包括的な概念リストを作るということを昨日まづ行っていた。そもそも、領域固有的概念に着目したのは、学習の目的の一つとして、対象とする領域の知識を獲得することがあるからである。また、そもそも発達を含め、学習というものがある特定の領域の中で行われていくという特性を考慮した時に、対象とするMOOCが持つ領域固有性に着目することは大切だと改めて思ったからである。

この概念リストを作った後に、早速そのリストを3000個のデータポイントに適用した。それまでの二つの定量化基準は全てRのプログラミングコードによって自動的に定量化できたのだが、今回のリストに関してはそれができなかった。おそらく私がRにより習熟していれば、そうしたこともできたのだと思うが、リストとセンテンスを対応させる時に数々の問題が生じ、その問題を解決するようなコードをその瞬間に書ける自信がなかった。そうしたこともあり、3000個のデータポイントをマニュアルで定量化していった。

この作業に数時間の時間を要したが、無事に時系列データが完成した。今日は午前と午後に協働プロジェクトの仕事があるため、研究に時間を充てることはあまりできないだろうが、一時間ほど時間があれば、フラクタル次元を特定することと、簡単な統計分析を行っておきたいと思う。フローニング
ン:2018/4/9(月)07:24

現在取り掛かっている研究について書き留めた後、またさらに研究について今後の取り組みについて考えていた。「取り組み」とあえて述べたが、具体的に言えばこれから進めていく作業のことである。実際の論文の執筆に関しては、すでにどのような項目を盛り込んでいくのかの大枠は出来上がっている。さらに、各セッションごとの文章もすでに執筆し始めているという状況だ。

私自身が文章を執筆することを好んでおり、論文を書くという行為の中に喜びを見出すことのできる特性を持っているため、今回の研究論文を書くことに関してもあまり心配をしていない。そのため、まずは昨日に作った時系列データの分析を行っていきたいと思う。新たな時系列データを作ったことにより、フラクタル次元の特定と統計分析をまた新たに行う必要がある。また、今回研究対象とするMOOCは、フローニンゲン大学が過去に五回ほど提供しており、私が研究を始めた時にはまだ最新版のデータがなかった。

幸いにも、四回目と五回目はレクチャービデオのコンテンツは全く同じであるため、仮に最新版のデータを使う場合にも、これまで作った時系列データは全て使える。ただし、変更が必要なのは、学習成果に関するデータである。すなわち、レクチャーの完遂率及びクイズスコアとテストスコアについては新たに取得しなければならない。昨日は日曜日であったにもかかわらず、私が金曜日の夜に送ったメールに対して、エスター・ボウマ博士から返信があり、レクチャーの完遂率を算出するためのデータの保存先を教えてもらった。

ボウマ博士のサポートには感謝をしなければならない。データの保存先を教えてもらい、中身を確認すると、確かにデータ量は膨大だが、それに対してRを使わずともエクセル上で簡単に完遂率が算出できるとわかった。そのため、完遂率については何も問題がない。一方、クイズスコアとテストスコアに関しては、先日確認したところ、まだデータが上がってきていないようだった。もう一度共有フォルダを確認し、そのデータがないかを確認する。

また、共有フォルダのみならず、現在私はフローニンゲン大学が提供するMOOCの製作者用のウェブサイトの権限も与えてもらっているため、そのウェブサイト上にデータがないかを確認する。仮にそれら二つの場所にクイズスコアとテストスコアに関するデータがなければ、やはりまだそれらのデー

タが上がってきていないのだろう。その場合には、学習成果を図る指標は全て第四回目のものを使うことにしたい。

細かな点で言えば、過去に用いたクイズスコアとテストスコアは、最初に問題を解いた時のスコアではなく、何度かその問題に挑戦した後の最終的なスコアの可能性があるため、もう一度その点を確認し、一回目のテストスコアを用いるように注意したい。今回研究対象とするMOOCでは、クイズに関しては無制限に何度もクイズ問題を解くことができ、テストに関しては三回までの挑戦権がある。そのため、二回目以降のスコアを用いてもほとんど意味がないであろうから、一回目の挑戦時のスコアを活用するようにしたい。

理想を言えば、今週末からの中欧旅行の前に上記の作業を全て完了させておきたい。そうすれば、旅行から戻ってきてからは、本格的に論文の文章のみに集中することができる。木曜日に行われる最終試験と現在取り組んでいる諸々の協働プロジェクトとの兼ね合いを見ながら、上記の事柄に取り掛かっていきたい。フローニンゲン:2018/4/9(月)07:50

2392. 能動的な反復学習

今朝の目覚めの際、またしても小鳥たちが美しく優しい歌声を奏でていた。ここ数日間連続して小鳥の歌声に包まれる形で起床している。これはとても有り難いことだ。

冬の時代、寒く真っ暗闇の中を一人で起床していた時のことを思うと、小鳥たちの歌声に抱擁される形で目覚めることができるというのはなんと有り難いことだろうか。小鳥たちの存在のおかげで、起床した直後から、その日を生きる活力と幸福感が湧いてくる。

八時を迎えようとしている今においても、まだ小鳥たちは小さく鳴いている。ただし、人々の活動が本格的に始まっているこの時間帯においては、小鳥たちの鳴き声がほとんどかき消されてしまっている。だが、それでも意識を集中してみれば、時折小鳥たちの美しい鳴き声が聞こえて来る。日々どのような活動にどれほど従事していたとしても、ふとした瞬間に小鳥の鳴き声に意識を向けるような心のゆとりを持ちたいと思う。小鳥たちは常に歌声を奏で、私たちを励ましてくれているのだから。

今日は午前中に、協働プロジェクトに関するミーティングが二件ほどある。そのミーティングに向けて、少しばかり最後の準備をしたいと思います。ミーティングが終わってからは、いよいよフローニンゲン大学での最後の試験となる、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの試験に向けて学習を進めていく。試験の対象となる文献にはこれまで三回ほど目を通した。

そのため今日からは、文献を読み進めていく中で重要箇所をまとめていったワードファイルを繰り返し読みたいと思う。午後の早い段階で一度読み返し、夜にまたそれをもう一度読み返す。明日は比較的時間があるため、そのワードファイルを時間帯を変えて、合計で三回ほど繰り返し読んでいく。一日の間に時間帯を変えて同じ情報と繰り返し接すると、定着率が必然的に高まるということを経験上知っている。

こうした繰り返しの実践は、思い起こしてみると中学校時代あたりに身についたものなのではないかとふと思う。学習した内容を定着させるためには、時間帯を変えて繰り返し接するということは極めて効果があるように思う。こうした繰り返しをする際にも、何も考えずに単純に繰り返すというよりも、繰り返しの最中は能動的である必要がある。今回の場合で言えば、ワードに書かれた文章を音読し、音読の合間合間に自分自身に対して記述された事柄を説明するようにする。

分かりにくい言い回しがあれば、その文章表現を改めていく。あたかも自分が自分の教師であるかのように自らに説明をしていく形で繰り返しワードを読んでいく。取り上げられた概念にせよ、理論にせよ、自分の腑に落ちる言葉でそれを説明していく。今日は少なくとも、そうしたことを午後と夜の二回にわたって行いたいと思う。実際の試験は木曜日の午後に行われるため、今日から水曜日、そして木曜日の午前中を含めて、随分と繰り返しの学習を行う時間がある。

フローニンゲン大学での最後の試験も拔かりなく準備をし、納得のいく形で試験を終えたいと思う。試験が終われば、その夜に中欧旅行に向けた荷造りを行い、翌朝いよいよワルシャワに向かって旅立つ。フローニンゲン:2018/4/9(月)08:10

2393. 高度な発達段階の言語特性

気がつくと、今日もいつの間にか昼の時間帯を迎えていた。先ほど昼食を摂る際に、いつもよりもゆっくりと時間をかけて食事をしようと思う自分がいた。とにかくここ数日間は研究で頭が一杯になることが

多く、それを引きずる形で食事中にもあれこれと考えが及び、食事にきちんと意識を向けることができていなかったように思う。日々の様々な時間帯で研究について考えてしまうのはある意味しょうがないことであり、それが時に研究の進展に有益であることは確かだが、適切な休息というものを自己に与えることはより一層大切だ。

今日の昼食は、食事をゆっくりと味わうことを意識し、今ここに意識を集中させるようにした。昼食を摂った後、今日の午前中に行われたオンラインミーティングについて振り返っていた。今日は連続して二人の方と対話をさせていただいたのだが、二人の話からは得るものが非常に多く、同じ時間を共有させていただいたことに有り難さを感じている。二人の方の話を聞きながら、いくつか気づきもたらされた。

一つは、自分自身がある意味文化人類学者のような形でこの世界を探究しているという気づきだ。実際に調査現場に出向き、そこで自ら体験を積むことによって探究を進めていくエスノグラファーとしての側面を自分が持ち合わせていることに気づかされたのである。今こうして欧州の土地で生活をする中で様々な気づきを得ているのも、おそらくそうしたエスノグラファーとしてのあり方が自分の中にあるからだろう。実際に自分が体験したことを再度自分の存在を通して検証し直し、考えを深めていくことを行っていく。そうした実践を通じて深まった知見を世の中に自分の言葉として共有していくことの大切さを改めて思う。

今回のオンラインミーティングも人との縁によって実現したものである。今私は、様々な協働プロジェクトに参画させてもらっているが、そうした仕事をこちらから募集したことは一度もない。実際に、そうしたある種のコンサルティングの仕事に関するホームページを設けていない——厳密には、それは形として一応存在しているが、この四年間私ですらも見ることがなく、いつそのこと閉じようと思っている。これからも、できるだけ人との縁を基にした形で社会に関与していく仕事を行なっていきたいと思う。

最後に、今日のオンラインミーティングを通じて得られた気づきは、高度な発達段階に到達している人たちの特徴として、言語感覚の変容、すなわち自然言語を超えて、よりシンボリックな言語を活用した思考形態が獲得されていくことに改めて気付かされた。とりわけ、キーガン、クック＝グロイター、トーバートなどが対象としている発達領域においては、高度な発達段階の人たちが用いる言

語特性が明らかになっている。その際たる特徴は、内的・外的世界の現象をメタファーを活用しながら意味を構築していくというものがある。

特に、外的世界の現象というよりも、自分の内側で生じている微細な現象を巧みに一つのメタファーとして表現していくことが可能になるという特徴がある。今日は実際に、二人の方との対話の中で、こちらが唸ってしまうぐらいの極めて洞察に富むメタファーがいくつも出てきたことに驚かされた。しかもそれは、単に内的現象をメタファーとして表現したことに留まらず、表現された言葉に潜む意味世界が極めて深いものだったのだ。上記の発達論者が提唱する発達段階5を超えていく際に見られる言語上の特徴としては、自然言語の限界を認識し、その限界を乗り越えていくための一つの手段として、高度な意味世界を表現するためのメタファーを生み出すことに対して自然言語を巧みに活用することができるようになることが挙げられる。

今日は協働者の方々との対話を通じて、既存の発達理論が述べていることの正しさを身を思っ
て経験するような場に立ち会うことができた。そうした場に立ち会うことができた幸福さをこの瞬間にも感じている。フローニンゲン:2018/4/9(月)13:33

2394. 絶え間ない模倣と創造

今しがた毎日の習慣である仮眠を取った。これから夕方に向けての活動を開始させる。仮眠の最中、意識が深い状態で休息を取っていた。夢を見ない深い意識であるコーザル意識の中で自己が多いにくつろいでいた。こうした休息は日々を充実して生きる上で欠かせない。

天気予報を確認すると、早朝に予想されていたものとは異なる形で天気が運動をしているようだ。午前中に雨がぱらつく予報だったのだが、今日は一貫して晴れマークに変わっている。雨が降るのは明日の午後から夜にかけてのことらしい。その予報もどれほど定かかは明らかではない。フローニンゲンの季節も春に向かって活発に動き始めたようだ。

今日は午前中に以前の曲を聴き返すことができなかったため、これから一曲ほど聴き返したい。本来であれば日記と同様に、曲に関しても編集を行っていくことができれば良いのと思うが、今の私は過去に作った曲を編集するという技術を持っていない。つまり、とりあえず曲として形になったも

のを最終形として、そこから何かより良い曲に磨き上げていくというある種の編曲技術のようなものを私は持ち合わせていない。そうしたことから、いつも曲を聴き返すだけであり、そこからタイトルをつけたり、その曲にコメントを残しておくことなどを行っている。

以前の曲にタイトルとコメントを付すことは毎朝の習慣の一つなのだが、どうしても朝一番に取り掛かる必要のあるその他の仕事があった場合には、それは別の時間帯に後回しとなる。今日は午前中にオンラインミーティングが二件ほど入っていたために、午後のこの時間帯から過去の曲にタイトルとコメントを付すことを行いたいと思う。タイトルはたいていの場合、後日改めて付けることが多い。しかし今日の曲は、作曲したその瞬間にタイトルが付されているものだった。時にはそういう曲もある。

今日はこれから、以前作った曲にコメントを付す。おそらくコメントを後日付すことが、曲に対する私にとってのある種の編集行為なのだろう。曲へのコメントを付すことができれば、「デジタルラーニングと学習環境」の最終試験に向けた学習を行う。文献をワードファイルにまとめたものを自分に説明するかのようにして音読していく。理解が浅い箇所や曖昧な箇所があれば、元の文献に立ち返ることを行いたい。

この学習にある程度目処がつけば、夕方あたりに一曲ほど新しい曲を作りたい。とにかく過去の偉大な作曲家に範を求め、彼らの作品を参照する過程を通じて自らの作曲技術を高めていきたい。真似をすることがいかに大切なことか。模倣と創造はきっと深い次元で通じ合っているに違いない。絶え間ない模倣と創造を続けていったその先に、日記と同じような次元で日々の経験を存在記として曲の形で綴っていくことが可能になる日がやってくるだろう。フローニンゲン:2018/4/9(月)14:36

2395. 内面の発達と言語の発達

今日も静かに一日が終わりに向かっていく。時刻は夜の八時を回ったが、外は相変わらず明るい。外気も少しずつ確実に暖かくなってきており、明日は曇りだがランニングに出かけようと思う。久しぶりにノーダープラントゾン公園を走り、気分転換を図りたい。

今日は一日を通じて仕事に没頭していたが、その中でも適宜休息を取ることを忘れなかった。これは些細なことのように思えて非常に大切なことである。特に私にとっては重大な事柄だと言っていい。

日々の取り組みを焦らず着実に深めていく際に、適切な量と適切なタイミングの休息が不可欠となる。こうした休息のおかげで、心身へ過度な負担をかけることなく、絶え間ない創造行為の実現が可能になる。

今日は休息を取ることへの意識が高く、そのおかげもあってこの時間帯においても不必要な疲労感は一切ない。休息を取りながら絶えず小さく前進していくことが自分の仕事を限りなく遠い場所に運んでくれる。そんなことを強く思う。

今日は夕方一曲ほど曲を作った。その前に、以前作った曲に対してコメントを付していた。前の日記で書き留めていたように、自分の作った曲にコメントを付すことは、日記の編集と同じ意味合いを帯びている。その行為を通じて、新たな発見が生まれることや、曲から励ましを得ることが起こる。

私は、曲から自分に与えられる気づきと励ましのフィードバックを受けられることに感謝をしていた。自分の創造物によって励まされ、自らの創造物に感謝をするというもおかしな話に思えるかもしれないが、私の中ではそれは全くもっておかしなことではない。なぜなら、自分の創造物は自らの力だけによって生まれたものではないことを知っているからである。それは自力と他力の産物なのだ。

そうしたことを考えてみると、自らの創造物に感謝の念を捧げるというのは、他者の創造物に感謝の念を捧げるのと何ら変わりはないことに気づく。自分の創造物が常にこれからも自力と他力が組み合わせあった結晶であるということを心に留めながら、これからも自分のライフワークに打ち込んでいきたいと思う。

今日の午前中のオンラインミーティングを再度振り返っている自分がいた。それほどまでに今日の対話から学ばせられることが多かったように思う。日本の対人支援産業の中に、今日対話をさせていただいた二人のような方がいることは本当に心強く思う。二人の方との対話を思い出しながら、深い内面現象を透徹した眼で知覚し、それをメタファーとして巧みに表現できることについて再度考えていた。ジェーン・ロヴィンジャー及びスザンヌ・クック＝グロイターの発達理論を眺めてみると、このあたりの言語感覚の変容についての優れた記述がいくつもある。

内面の成熟に応じて、私たちが用いる言語の性質が根本的に変容していくことは非常に興味深い現象だと思う。私たちが用いる言語と内側の感覚は対応関係にあり、内面の発達とは単に用いる言語が質的に変容することのみならず、それに合わせて感覚の深まりも同時に起こる。言語と感覚のどちらが先に深化するのかは不明であり、おそらくは同時にそれが起こっているのだと思うが、いずれにせよ、感覚の深まりによって、知覚された事柄を自然言語の使用方法的限界に迫るような方法で比喩的に表現する力を人間が発揮できることには驚かされる。

これは単純に喩え話が上手いなどということとは次元を異にした話であることは言うまでもない。内面の成熟と言語の発達に関する関係性について、改めてクック＝グロイターの“Postautonomous Ego Development: A Study of Its Nature and Measurement (1999)”、“Comprehensive Language Awareness: A Definition of the Phenomenon and A Review of Its Treatment in the Postformal Adult Development Literature (1995)”、“Ego Development: Nine Levels of Increasing Embrace (2005)”を読み返してみようと思う。これらは数年前に何度読み返した分からないほど洞察に溢れる文献であり、久しぶりに再読をしてみようと思う。フローニンゲン:2018/4/9(月)20:29

2396. 固有の日々を生きて

毎朝の目覚めには必ず小鳥の鳴き声が聞こえて来るようになった。今日は昨日よりも数の多い小鳥たちが寝室の外の木に止まり、そこで美しい鳴き声を奏でていた。今もまだその声が聞こえて来る。

今日は五時半過ぎに起床し、六時から一日の活動を開始させた。一日一日が静かな流れの中で過ぎていく。過ぎていくのは時なのか、それとも自分の内側にある何かなのかはわからない。そもそも時にしても、内側の何かにしても、「過ぎていく」ようなものではないのかもしれない。それを表現するための最適な言葉を探すために今日という一日があり、毎日があるのだと思う。

自分の内側の感覚を深め、その感覚に合致する言葉を見つけていくこと、ないしは生み出していくことを着実に続けていく。これは昨夜の就寝前にも考えていたことだ。内的感覚と言葉に溝を作らず、両者の間に齟齬をきたすようなことを避ける必要がある。内的感覚も言葉も同時に深めていき、それらが絶えず手を結んでいる関係をこれから一段と作っていく必要があるだろう。

今日は「月曜日 (Monday)」の次にある「火曜日 (Tuesday)」という日らしい。それらの名前の妥当性についてはここで問うことをしない。ただし、一日一日が連続性と差異の内包された尊い存在であることを考えてみたとき、日々を上記のような名辞で表現するのは少々乱暴のように思う。そのため、私は日々を違った名前と呼ぶことにする。

毎日はその日の自己が経験する固有の内的感覚や思考によって構成されている。そのため、日々の名称は全て、自分が日々を生きた固有の経験によって付されるものにしたい。自己とそれを取り巻く存在によって作り出される毎日は固有の輝きを持っている。私は、その輝きを反映した名称を日々につけていくことにした。

中欧旅行に出かけるまであと少しとなった。また、その前日に控えている「デジタルラーニングと学習環境」のコースの最終試験も近づいてきた。今日は午前中に、その試験に向けた学習を行う。行うことは昨日と変わらず、これまで読み進めてきた文献のまとめを再度繰り返し読んでいくことである。午前中に全体を通して読み、夕方にもう一度全体を読み返す。少なくとも二回は繰り返し読み返し、可能であれば夜にもう一度ざっと読み返す。こうした繰り返しによって知識が確実に定着していくだろう。

また、当該コースのグループワークとして執筆していた論文の最終レビューを午後に行う。数日前に、この課題を一緒に取り組んでいるハーメンが大変素晴らしい仕事をしてくれたので、あとは私がレビューをするだけとなった。今日の午後にレビューを行い、夕食前をめどにハーメンに最終稿を送っておきたいと思う。

今日は現在取り組んでいる研究に着手するのではなく、ある協働プロジェクトの案件を少し先に進める。中欧旅行の日までにこなしておきたいことはいくつかあるが、それらを全て完了させた上で中欧の地に降り立つことができると思う。今日も固有の一日が始まった。フローニンゲン:2018/4/10 (火)06:28

2397. 創造の流れへの返礼

起床直後に日記を書き始めてみると、自分が書こうと意図していないような事柄が突如姿を現した。文章を書くというのはこうしたことが起こりうるのだ。書くことに潜む不思議な力を早朝から感じている。

こちらが意図していないことが文章の書き出しと共に生まれうるということ。それは、私たちの存在が絶えず今の自己認識を超えた境界線に足を踏み入れていることの表れかもしれない。

つまり、私たちは常に自らが意図していない存在を内にはらんでいるのである。それは自分の内側にいる未知な存在であり、発達可能性と呼ぶべき存在なのだろう。文章を書くことによってこうした存在が姿を見せうらということに驚かされる。内的感覚と共に言葉を紡ぎ出していくことの不思議さにはいつも驚かされてばかりである。

先ほど、固有の日々を生きることについて日記を書いていた。これも知らず知らず自分がその主題に引き込まれていくかのように書かれたものである。日々が固有であるというのは、毎日が異なったものを内包しているということだけを意味するのではなく、自己の存在そのものが異なるものを日々顕現させているということも意味する。すなわち、内外世界の両方が絶えず差異を内包したものであるがゆえに日々は固有なのだ。厳密には、日々という時間単位よりも、毎日の瞬間瞬間が固有であると述べた方がいいだろう。

絶えず絶えず差異が内包された瞬間瞬間に対して、私はよく畏怖の念を覚える。今この瞬間に聞こえる小鳥の鳴き声と次の瞬間に聞こえるそれは異なる。そして、それを聞いている私自身の内側の思考や感覚も移り変わっていく。瞬刻瞬刻の移り変わりが一つの巨大な流れを作っていることに気づかないだろうか。日々は自分だけの固有な感覚によって作り出されるものではなく、全ての存在者と共に生み出す一つの大河なのだ。そのようなことにはたと気づかされる。

夜が静かに明けてきた。ここ数日間は、スヴァトスラフ・リヒテルの演奏するバッハの平均律クラヴィーア曲集を聴き続けている。もう何十時間この曲を聴いているだろうか。今朝も起床と共にこの曲を聴き始めた。音楽が日々の生活に不可欠なものとなった。それは単に音楽を聴くということのみならず、音楽を作るということに関してもである。

音楽が外から内に流れ、内から外に流れていく生活。これも一つ、この世界の絶え間ない流れに参画する一つのあり方なのだろう。音楽を聴くという行為によって一つの巨大な流れから音を汲み取るだけではなく、その流れに再び音を返していくのである。そうした返報的な行為としあるのが音楽を作ること、すなわち作曲なのだと思わされた。

なるほど、作曲とはこの世界という絶え間ない流れへの音を通じた返礼行為なのだ。音楽と接することを通じて、この絶え間ない創造の流れから何かを汲み取るだけではなく、創造の流れには創造を返礼していくことを私は大切にしたい。

音楽から得られる充実感と幸福感を自分の内側に留めておくのではなく、充実感と幸福感をそのままこの巨大な創造の流れに返していくのである。「ああ、そういうことか」という感覚が自分の中を満たしている。今日も創造の流れへの参画と返礼を行っていく。それは自分ができる数少ないことの一つだ。フローニンゲン:2018/4/10(火)06:50

2398. 作曲実践と多様な意識状態

昨日は、昼食後に作曲実践を行った。そこではベートーヴェンの曲に範を求めながら曲を作った。数日前まではショパンの作品をいくつか参考にしながら曲を作っていた。作曲に取り組んでいる時の自分の意識状態や思考と感覚の有り様については、今後より観察を深めていきたいと思った。

というのも、今この瞬間までそのようなことに一切気を払っていなかった自分がいることに気づかされたからである。「そういえば自分は作曲中に何を考え、何を感じ、またどのような意識状態にあるのだろうか?」という問いが突然に浮上したことは、また何か私を一步前に進めてくれるように思う。それらの事柄を作曲実践の最中に行うことは難しいかもしれない。なぜなら、作曲実践の最中はある種の没入状態にあることも多く、そうした中でメタ認知的にリアルタイムでその瞬間の自己を捉えていくことは至難の技だからである。

もしかすると、メタ認知というのは没入状態では発揮されえない能力なのではないかと思う。もしかするとメタ認知にも次元があり、世間一般で言われる初期のメタ認知能力から始まり、今度は没入の最中でも発揮できるメタ認知能力が育まれていくのかもしれない。今はまだそうした高度なメタ認知能力を私は獲得しておらず、対象への没入状態では全体との一体感が認知を勝る。今後はこうした全体との一体感の中でもメタ認知を発揮できるようになるのだろうか、という関心は尽きない。

いや、改めてこの主題について考えてみると、没入状態でメタ認知が発揮されるというのは、それは究極的なメタ認知ではないと思われた。というのも、意識の状態特性に着目してみると、全てを絶えず目撃しているという究極的なメタ認知を発揮する観想的な意識状態の次には、目撃する自

己と対象世界全体が一体となる非二元の意識状態が存在しているからだ。そのように考えてみると、作曲実践の最中に仮に音楽世界と完全に同一化しているのであれば、それはある意味、観想的な意識状態ではなくて、非二元の意識状態が生み出す現象だと思うのだ。

そうなってくると、非二元の意識状態でメタ認知を働かせるというのはおかしな話に思えてくる。いかに究極的なメタ認知であろうとも、それが発揮された瞬間の意識の状態は観想的なものにならざるをえない。そのようなことを考えていると、日々の私の意識状態はとても色彩に富んだものであるように思える。意識状態の研究者は数多くの状態特性を明らかにしているが、古典的な括りでいえば、グロス、サトル、コーザル、観想、非二元という五つの意識状態を私は日々行き来していることに気づく。

音楽を創造するという作曲実践は、音楽世界と自己を一体のものにしてくれ、私を非二元の意識状態にいざなう力を秘めている。おそらく作曲という創造行為は、全ての意識状態からなされるものなのだろう。グロスの意識で作曲をする日もあれば、観想の意識で作曲する日もある。また、サトルや非二元の意識で作曲する日もあるというように、日々異なる意識状態の中で曲が生み出されていく。より正確には、一つの曲を作っている最中にも意識の状態は変わりうるのであるから、創造された一つの曲は実に多様な意識状態の産物である可能性もあることを忘れてはならない。

今日も昼食後に作曲実践を行う予定である。作曲過程の中で時に対象と没入しながらも、時に自らの意識状態を観察するような観点を持つておくのも面白いかもしれない。意識状態というのはつくづく奥深い現象であり、その現象を体験する人間存在はさらに奥深いと改めて思う。フローニンゲン：
2018/4/10(火)07:14

2399. 躍動する一つの織物

内側からエネルギーが進る感じがしている。時刻は昼時となり、先ほど昼食を摂り終えた。昼食を摂っている最中にも、自分の内側から何か途轍もない巨大なエネルギーが湧きあがってきていることに気づいた。厳密にはそれはもはや大きさや量などを持たない。それは無尽蔵の生命エネルギーのように知覚された。

たった今、一つ幸せなことがあった。それは、「午後から雨が降るという天気予報が外れたことに伴う笑いから得られた幸福感」であった。

吹いているの吹いていないのかさえ分からないぐらいの優しい風がフローニンゲンの街を歩いている。それは駆け抜けるというよりも、この街を撫でるようにして歩いていると形容した方がふさわしい。穏やかな太陽光が地上に降り注いでおり、どこか街全体が柔らかな幸福感に包まれているように感じる。

今日は久しぶりに昼食前にランニングに出かけた。ここ数週間は、研究インターンシップのオフィスに週に二度ほど通っており、その道すがらあまりにも寒いので、いつも半分以上の道のりを走っていた。行きと帰りの走っている距離と時間を考えると随分のものがああり、インターン期間中はあえて外にランニングに出かけることをしなかった。そうしたこともあって、今日近所のノーダープラントソン公園へランニングに出かけたのは随分と久しぶりのことであった。

正式な形で走るのは久しぶりだったが、最近ではインターン先のオフィスのみならず、近所のスーパーへも走っていくことが多く、体力的には以前と全く変わらない自分がいた。自宅を出発すると、春の穏やかな太陽の光に優しく包まれた。また、春の花々の香りがどこからともなく漂ってくる。そうした中を私はランニングし、とても爽快な気分になっていた。

近所の学校の子供たちがちょうどノーダープラントソン公園に遊びに来ていたようであり、非常ににぎわっていた。犬の散歩をする人や、私と同じようにランニングを楽しむ人などの姿が見える。また、公園内にあるカフェでくつろいでいる人たちの姿も見かけた。何よりも、公園全体が新たな生命の息吹に溢れていたことが私を最も感動させてくれた。

公園内をしばらく走った後、私は久しぶりに行きつけのインドネシア料理店に立ち寄った。これまではランニングの後にこの店に立ち寄るようにしていたため、インターン期間中はこの店に立ち寄ることはほとんどなかった。数週間前に一度だけレストランの中でランチを摂ったぐらいであり、しばらく時間が空いていた。店に入ると、顔なじみの店主と店員がいつものように挨拶をしてくれた。

「今日はいい天気だね」とお互いに口を揃えて言うてしまうほどに、今日はとても良い天気だ。店主の女性も上機嫌であり、それはこの天気のおかげだと述べていた。いつもと同じ注文を片手に、再び私は自宅に向けて走り出した。すると、様々な人たちの活動が改めて私の目に飛び込んできた。

客を待つ間に書籍を読んでいる美容師、骨董品屋で品物のホコリを払っている店主、道を工事する工事員、ベビーカーを押しながら道を歩いている母親。私の目に入ってきた人々を挙げればきりが無い。この世界は、そうした一人一人の活動によって回っている。一人一人が自分の仕事に取り組み、それがこの社会全体を絶えず動かしているのだということにはたと気づかされた。

これは欧州に来てよく実感させられることであり、最近はその頻度のみならず、何か感覚そのものが深くなっているような気がする。この世界は本当に一つの生きた織物として存在しており、その織物を構成する一つ一つの糸も躍動した生命を持つ。自分も含め、目に入る全ての人たちが掛け替えのない一つ一つの糸であり、それらが一つの全体としての生きた織物を創造している。そんなことを考えながら、私は自宅に向かって走り出した。フローニンゲン:2018/4/10(火)13:42

2400. この世界との融和

心身の調子がすこぶる良い。何かまた一つの結界のようなものが崩壊し、内側から爆発を伴うような力強いエネルギーが渦巻いている。自己の存在が弾けとび、この世界全体の中に溶け込んでしまいそうだ。自己が爆発することは自己の消滅を意味するのではなく、自己の核は依然として明晰に存在している。ただし、その核そのものも極めて純化されていき、それがこの宇宙全体と融和していくかのような感覚なのだ。

「それは何のようですか？」と問われれば、答えに窮するが、それは今聞こえてくる小鳥の鳴き声そのものであり、目の前に見えるつぼみが出始めた木々だと言える。別の表現で言えば、先ほど食べたインドネシア料理のようだとも言えるし、今書斎で流れてくるバッハのようだとも言える。それら全ての中に自己が溶け出していて、だからこそ自己はそれら全てなのだ。そのように説明すればとても分かりやすいだろう。

こうした現象を見るにつけ、おそらく私はまた何か一つの変容体験を通過したのだと思う。それを引き起こしたのは、長く厳しい冬の時代であったことは言うまでもない。確かに欧州で迎える二回目の

冬は、一年目の冬に比べると大きな障害は無かったように思える。しかし意識の水面下では、依然として過酷な厳しさが存在していたことを疑うことはできない。そうした長い冬の時代を経て今の自分がある。そして、この自分はもうこの全体としての世界の中に溶け出してしまいたいのだ。

今朝方、春のメリーゴーランドは変動性と移り気が激しいと思っていた。確かにこれまでは上下左右に揺れ動くような季節の移り変わりを経験していた。今、ようやくそのメリーゴーランドは緩やかな揺れを伴いながらも安定して動き出した。そんなメリーゴーランドに乗りながら、日々のライフワークを少しずつ前に進めていきたいと思う。

今日はこれから午後の仕事に取り掛かる前に、作曲実践を行いたい。日々作曲実践に従事する傍ら、やはり自分の内側に、作曲技術の発達過程の研究を行いたいという気持ちが日増しに強くなっていることに気づく。これまでは、主に企業社会や学校教育の文脈に関係した発達現象を探究していたが、ここからはそこに音楽の世界における発達現象の探究を本格的に組み込んでいきたい。とりわけ、作曲理論の理解度に関する階層的複雑性と作品そのものが持つ階層的複雑性のそれぞれの発達プロセスとメカニズム、そして両者の関係性を研究していきたい。

階層的複雑性というのは、マイケル・コモンズやセオ・ドーソンが提唱した概念であり、古くはカート・フィッシャーが明らかにした発達の普遍的な特性のことを指す。それが言語的な領域であれ、非言語的な領域であれ、いかなる発達現象にも階層的複雑性という質的差異の構造的進化を見て取ることができる。階層的複雑性という一つ概念を基礎に起き、まずは作曲理論と作曲技術の様々な領域における独自の発達特性を調査していきたい。というのも、階層的複雑性というのは、あくまでも全ての発達領域に存在する骨組みのようなものであり、それは決して肉ではない。

そのため、個別具体的な領域の発達プロセスとメカニズムを明らかにするためには、ある意味その骨組みへの肉のつき方を一つ一つ丁寧に観察していく必要がある。例えば今関心を寄せているのは、転調とハーモニーという二つの領域を取ってみたときに、それぞれの領域に対する理解度の発達速度の差を見ていくことなどが挙げられる。

さらには、理解度と実際の作品におけるそれらの知識の活用度合いの複雑性を比較してみるというのも非常に興味深い。まだ何も先行研究を調べていないが、作曲に関する各領域には固有の発

達プロセスがあり、領域固有の知識の理解度にせよ、その適用力にせよ、まだほとんど解明されていないのではないかと思う。これまでいくつもの作曲理論を眺めてみたが、それらは領域固有の知識を紹介することにとどまり、発達プロセスを考慮したテキスト体系になっていないことに気づく。これはおそらく作曲に関する初学者であるからこそ気付けることなのかもしれない。

仮にこの数年以内に博士課程に進学することになれば、音楽の世界における発達現象を取り上げたいと思う。これまで取り組んでいた領域とは全く異なる領域の中で発達現象を探究していく。ここからは頭の片隅で、博士課程で研究するに価する大きなテーマ設定を考え、いくつか小さい研究テーマを立てていこうと思う。二つ目以降の博士課程においても、自分が最も研究したいと思うテーマを探究していく。

それがこれまでの自分がいた領域と全く異なっても関係ない。むしろ異なっていればいるほどに望ましい。究極的に異なるものは、結局一つの究極的な地点に向かっていくのだから。

これからの探究がより深く充実したものであり続けることを静かに願う。フローニンゲン:2018/4/10
(火)14:17

No.960: Augmenting Expectation

I realize that all of the things in my life restart again. A tranquil expectation is augmenting and pulsating inside of myself. Groningen, 09:16, Saturday, 4/28/2018